

別世界の道中なり、内八文字にかいどりまへ云々、東海道名所記島原の條に、只今あげられてか  
 ぶろやり手におくられ、長きもすそをかいどり、八文字に踏でゆくうしろかげ云々あゝいも、内八  
 文字なるべし、

里詞

〔洞房語園異本考異〕<sup>上</sup>隙なる遊女をお茶を挽といふ事實は古語成べし、當世猶しかり、里語とい  
 いつべし、總じて廓さかと號する處には、里語とて外處とは違ひたる言葉あり、分て武陽の北廓なる  
 里語は、ひと際耳立たること多し、ある老人のいへるは、爰なる里語は、いかなる遠國より來れる  
 女にても、此言葉をつかふ時は、ひなのなまりぬけて、元より居たる遊女と同じに聞ゆ、この意味  
 を考へて、言ならはせし事也とぞ、

〔嬉遊笑覽九娼妓〕吉原遊女の詞一種ありて、他に異なるやう也、故に徒流がなんせ、玄んす、りんすな  
 どを初めとして、餘國に聞ざる言葉多し、奇語と云へり、おもふに、これもと島原詞の名殘なるべ  
 し、浮世物語一、島原の處に、谷の戸出る鶯の、初音おぼろの聲を出し、又きさんしたか、はやういな  
 んし云々、その盃、これへさ、んせ、ひとつのまんしなど見え、又一代男六、島原詞に、有ますといふ  
 べきを、あんすと云へり、吉原詞の末をはぬるは是なり、然るに元祿中、由之軒がかける誰袖海に、  
 吉原ことば、ふつゝかなることえり出て記し、處呼でこいといふことをよんできろ、いてく  
 るをいつてこひ、急げをはやくうつはしろ、ありくをあよびやれ、そふせよをこうしろ、おそはる  
 るをうなさる、腹の痛むをむしかたい、玄やんなをよしやれ、こそばいをこそぐつたい、女郎の  
 よこきるをてれんつかふと云、是は唐音なり云々、おさらばゑ、さうさ、かうさ、おつかない、さうす  
 べい、所がらとはいひながら、島原の心では、さてもうつくしい顔して、けうこつな物いひとなん  
 〔嬉遊笑覽九娼妓〕素見〇、ぞめ〇、き〇、万葉に、友の騒ソウ、砂石集に、世間公私のぞめきなどみえて、古言なり、和  
 訓栞に、そゝめく事に今もいふなり云々とあり、因果物語に、七歳に成ける子、此ぞめきのまぎ